

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

享和二年（一八〇二年）七月に大阪・淀川で大水害が発生し、多数の死者、行方不明者が出ました。「澤」という名の少女は、目の前で両親が洪水に流されてしまいます。「澤」もおぼれて気を失い、避難所で数日過ごした後、両親を探すため避難所を飛び出し、みずばらしい格好で、あてもなく歩き回っています。あちこちにたくさんのお体骨が転がっている残酷な光景に、「澤」は大きなショックを受けました。

気が付くと、ふた親によく連れて来てもらった順慶町を、ふらふらと幽鬼のごとく漂っていた。水害前は朝から夜まで買い物客で溢れる町だった。今、食べ物を探る屋台見世が何軒か戻っており、団子を焼く匂いや、うどん出汁の香りが漂っている。食べ物の匂いが澤の脳を打ち抜いた。酔ったつんとした香りに、甘辛く炊いた穴子の匂い。吸い寄せられるように、一軒の屋台見世の前に立つ。穴子の押し寿司が、客から取り易いように皿に並べてあった。思うより先に手が伸びた。だが、押し寿司を掴む前に、店主にその腕を掴まれ、捻じ上げられた。

1 「何さらすんじや」

担ぎ屋台から出てきた店主が、逃げる気力もない澤の腹を足蹴にする。澤は脆くも地面に崩れた。二度、三度、と店主が蹴るのを見かねたのだろう、止めなはれ、と女の鋭い声が出た。澤が睨む目を向けると、年の頃、三十七、八歳。商家の女将らしく立ち姿の美しい女が、店主に敵しい視線を投げている。水浅葱色の帷子に笹の葉をあしらった帯、髪に挿した珊瑚のひとつ玉の簪に至るまで隙がなかった。脇に付き添っている若い女衆は、がたがたと震えるばかりだ。

2 「まだ童女やおまへんか。情無しなこととして、恥ずかしいんですか？ こんな時や、勘忍したつたらどないだすのや」

「けんど、こつちかて商売や」
それを聞いて女は、手にした巾着から銭を取り出して皿の脇に置いた。

「これで文句なしや。もうこの子に手出しは無用です」

女の置いた銭が多かったのか、店主は、すぐ包みますよつてに、と歯を見せた。女は澤の腕を取って立たせながら、毅然とした口調で言った。

3 「要りまへん。料理は料理人の器量次第。お前はんの器量のほどはようわかりました」

4 色を失う店主の前を、女は澤を抱きかかえるようにして立ち去った。
この女こそ、大坂の食通に愛された名料理屋「天満一兆庵」の女将、芳だつた。

天満橋の高札場から幾分北へ上がったところに、その店があった。洪水のあと手を入れたのだろうか、漆喰壁の純白が日差しに映えて眩しい。店の表は丁寧に掃き清められ、格子に埃の浮いた気配も無かった。暖簾は終わっていたが、昆布出汁の甘い香りが、表通りまでほのかに漂っていた。

※ 「慌てて食べたらかかん。ゆつくり、ゆつくりやで」

※ へつついが三つ並んだ、天満一兆庵の内所の台所。火袋から差し込む陽が、つやつやと磨きぬかれた板敷に反射している。芳はそこへ澤を座らせ、重湯を匙で掬って、その口元へ運ぶ。長い間、ともに食事を摂っていない胃には、まず重湯から慣らして行くのが一番だということを、芳はよく知っていた。

背後に控えている女衆が鼻をつまんで必死に耐えている。澤の体は汚れ、悪臭

を放っていた。このひとは何で私を助けてくれるんやろか。客商売、それも料理屋のようなのに、と澤はぼんやり思う。

匙から重湯が口の中へ入った。甘い。何て甘いんやろう。

澤は驚いてはつきりと瞳を開いた。米の甘みが舌から口一杯に広がった。「どうや？ わかるか？」

芳がふんわりした笑顔を見せる。

「これがお米の味や。他には何も足してへんのやで。弱っている時にはこういうもんを食べるんが一番なんや」

言いながら、芳が重湯をもうひと匙、澤の口に含ませる。美味しい。

澤は心の底からそう思った。こんな時でも美味しいと思えるのが、自分でも不思議だった。芳が、澤の口の端についた重湯をそつと指先で拭く。それは、母わかかの仕草を思い起こさせた。母を思った途端、澤の双眸から涙が溢れて、頬を伝い落ちる。芳は何も言わず、碗と匙を脇に置くと、そつと澤を抱き寄せた。

5 「二寮さん、お召し物が」
鼻を摘まんでいた女衆が金切り声で言うのを一瞥で制して、芳は澤の背中をどんとんと優しく叩いた。慰めの言葉などは一切かけなかった。そうして澤がある程度落ち着いてから裏の井戸端へ連れて行き、女衆に命じて運ばせた湯を盥に張って、自ら澤を洗った。髪の中でこびり付いた泥を幾度も湯を替えて丁寧に洗いながら、澤から名前を聞き出す。

6 「ほうか、澤標の澤か。ええ名あや」
澤は水脈、水脈のしるべを澤標と呼ぶが、長い棒の先に魚の尾の形に木を組んだそれは、航路の安全のために欠かせない。水都大坂に暮らす者には馴染み深いものだった。

※ 風邪を引かぬように、と芳は澤の濡れた身体をしっかりと拭くと、丁稚用のお仕着せを着せかける。

7 「堪忍やで。お前はんくらい童女が居らんよつて、身分に合うたもんがあるへんのや」
藍染で背中に丸に天の文字が染め抜かれたお仕着せは、温かく肌に添った。芳が汚れた着物を洗っておくように言いつけると、若い女衆はわずかに眉をひそめた。

8 「中野村あたりで堤防が切れてたら、こども皆、跡形も無う流れてしもてたやろ。澤の姿はあんたの姿でもあるんやで」

芳は女衆に強い口調で言うのと、澤を再び台所へ連れ戻った。そして板敷に澤と膝をつき合わせるようにして座る。

9 「聞いておかなあかんことがおます。辛いやろとは思いますが、答えておくれやす」

芳の改まった声に、澤は自然と居住まいを正した。在所と親の名を尋ねられ、七月一日のことを問われた。澤は切れ切れに答えていたが、ふたりが濁流に飲まれたあたりまで話し終わると、力尽きて板張りに突っ伏した。

※ 女将——料理屋や宿屋などの女主人。
水浅葱色の帷子——緑がかつた色の、夏向きの着物。

①

解答は全て解答用紙に記入しなさい。
字数制限のある問いは、句読点も一字に数えます。

女衆——召使いの女のこと。

情無し——思いやり、やさしさが無い。

巾着——布や革で作り、口をひもでしめる小さな袋。

大坂——現在の「大阪」のこと。当時はこのように表記した。

高札場——「高札」とは、主に江戸時代、禁止事項や犯罪人の罪状な

どを記し、一般の人に知らせるために高く掲げた板の札。

高札場とはその「高札」を立てていた広場や大通りに面し

た場所のこと。

へつつい——かまどのこと。

内所——表向きでないところ。奥向きの所。

火袋——だんろなどの、まきや炭を燃やすところ。

重湯——水分を多くしてたいた粥の上澄みの液。病人などに食べさせ

る。

ご寮さん——大阪弁で「こりよんさん」と読む。

ここでは、「女衆」が「女将」を呼ぶときの呼び名。

一瞥で制して——軽くならんで。

丁稚——商家などに住み込み、使用人として働いた少年のこと。

お仕着せ——主人が丁稚などに与える、形や色の決まった衣服。

問一——部1のように「店主」が言ったのはなぜですか。説明しなさい。

問二——部2について、「こんな時や、勘忍したつたらどないだすのや」は、

どういうことですか。それを説明した次の文の [] にあてはまる

言葉を考えて答えなさい。

多くの被災者が出た非常時なのだから、

と「店主」に訴えていると「い」。

問三——部3について、「女」の言っていることはどういうことですか。そ

れを説明した次の文章の [] にあてはまる言葉を四十字以内

で考えて答えなさい。

「こで言う「器置」とは、すぐれた人格、品性のことを指し、「器置」

の有無によって、その人の作る料理の価値が決まると「女」は考えて

いる。 [] ような「とをさする」店主「に、

すぐれた料理人としての「器置」があるとは思えず、「店主」の料理を

食べる価値はない」と。

問四——部4「色を失う」の意味を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア はげしい怒りにふるえる。

イ 予想外のことでうろたえる。

ウ がっかりして力を落とす。

エ 気がかりで落ち着かない。

問五——部5・6「女衆」について、「女衆」は、「澤」に対してどのような

感情を抱いていますか。二十字以内で説明しなさい。

問六——部7「澤の姿はあんたの姿でもあるんやで」とはどういうこと

ですか。五十字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

月曜日の早朝、[※]店に本を補充するため、自転車の荷台に百冊ほど積んで、私はペダルを踏んで行った。久しぶりなものだから、大荷物に乗せて走る要領を忘れてしまい、ハンドルがふらつく。

その時だった。私の傍らを男子中学生が自転車で通り過ぎた。と思った瞬間、彼は、急に、私の前をよぎるように、ハンドルを切った。

あっ、とふらつきながら、ブレーキをかけた。とたんに相手は何事もなかったかのように、スピードを速めて走り去った。私は倒れる前に、とつさに足を地に着けて、重い車体を支えたが、運が悪ければ、車道に投げ出されていたことだろう。車の往来が激しい道路である。

中学生は、わざと私に寄ってきたのである。危なっかしく走る私の自転車が、目ざわりだったのだろう。ちよいと、からかってやれ、という軽い気持ちだったのに違いない。相手に大げさをさせるとか、万が一の場合は死ぬことになる、などと毛頭考えなかったのだろう。考えたら、とてもできないはずだ。

死んだ老母が、まだ歩けたころ、後ろから走ってきた自転車の、やはり中学生にののしられたことがある。老母は田舎道の感覚で歩道の真ん中を、とぼとぼと歩いていたのだが、中学生にはそれがよほど我慢のならないことに映ったらしい。「このゴミ」とはきだすように罵倒したそうだ。

店の書棚に新入荷の品を詰め、さて帰ろうと表戸を開けたところ、わが家の犬と同じほどの大きさの白犬が、しつぽを振りながら飛びこんできた。あたかも旧知であるかのように、愛嬌をふりまく。私には何という種類なのかわからないが、かなりの老犬らしい。首輪をはめているので、飼い犬のようだ。紐を切って逃げてきたのだろうか。

表を見回したが、飼い主らしい姿は見えない。しつ、しつ、と追い払っても、逃げない。どころか私の脚にまとわりついて離れない。盛んに尾を振って、世辞を使う。

「まいったなあ」私は声に出して、つぶやいた。

急いで店に飛びこみ、戸を閉めたが、前脚で開ける開ける、としきりに引つかく。そして世にも悲しげな声を上げる。知らぬ顔をしていれば、あきらめて去るだろうと、無視して店の片付け事を始めた。しかし一向にあきらめる様子がない。通行人が不審の目で、店の中の私を見る。飼い犬を邪慳にして、どういう気なのだろう、というような非難のまなざしを投げつけていく人もいる。

私は警察署に電話した。保健所に相談したらどうか、と言われた。保健所の電話番号を教えてください。

すぐには、掛けなかった。ためらったのである。迷い犬を連れてこいと言われたら、どうする？ 飼い主を探したいのに、結果的にこの犬を不幸にすることになったら、とてもじゃないが、^A寝覚めが悪い。

「首輪に何か手掛かりになるものをつけていませんか？」保健所の人が開いた。

「プレートのようなものがついています」

「ああ。それはよかった。プレートに番号が刻印してありませんか？」

「あります、あります」

「番号を読んでくれませんか。登録番号ですから、台帳を調べれば飼い主が一発で判明します」

「そうでしたか」

狂犬病の予防注射を、飼い主は毎年義務づけられている。その際に登録される。

私が番号を伝えると、係員が、折り返し電話をする、といったん電話を切った。十分ほどして返事がきた。飼い主がわかったが、どうやら留守のようである。

「遠方の人ですか？」私は聞き返した。

「いや区内在住の方です。どうします？もし、お困りでしたら、私どもが預かりますよ。責任をもって飼い主に引き渡します」

「そうしていただけると助かります。これから連れていきます」

保健所は、私の店からは、何ほどの距離でもない。私は犬の首輪にビニール紐をつないだ。適当な紐がないので、仕方ない。用心のため、紐は二重にした。本を縛る紐だから、丈夫なことは丈夫である。

犬に水を飲ませると、「さあ、行くよ」とせきたてた。犬はうれしそうに、めったやたらに尾を振り、走るように歩き出した。数メートル歩いては、振り返って私の顔を見上げる。

【 中 略 】

途中、何度か休んだ。犬の方が道ばたにしゃがみこんでしまうのである。自転車で通りかかった小学生二人が、「ポロッチイ犬」とあざけた。ビニール紐が、いかにも見すばらしいのだ。「ごめんよ」と私は犬にあやまった。あえぎながら、ようやく保健所にたどりついた。ところが建物を目にしたとたん、犬が地面にはいつくばり、一步も動かなくなった。

せきたてると、世にも悲しげな声でなくのである。保健所から出てきたジャンパー姿の老人が、「むごいことするねえ」と私をにらんだ。

「違いますよ」私はあわてて弁解した。

「小さい時はかわいがって、年を取ると邪魔者扱いをする。世も末だね」

老人が私をにらみつけたまま、まくしたてた。

1 どう見ても、私は虐待者の姿らしい。ビニール紐が、どうもまずかった。

2 罰が当たらねばよいが」老人が捨て台詞をした。

犬の悲鳴を聞きつけて、さきほど電話に出た男の人が、建物から走ってきた。た。

「飼い主と連絡が取れましたね。これから引き取りに来るそうです」

「そうですか」

男の人が私の手から紐を受け取った。

「こりや、かなりの年のようですね。十四、五歳はゆうに越えているな」

男の人が頭をなでると、ようやく鳴きやんだ。盛んに尾を振り始めた。

「ばかに人なつっこいな。おお、よしよし」

「帰ります。どうぞよろしく願います」私は挨拶した。

「そうですか。ご苦労様でした。おや、来ましたよ。飼い主」

高校生らしい女の子が、ゆっくりとこちらに歩いてくる。私たちのそばに来ると、無言で立ち止まった。

男の人が相手の名前を言い、確認した。女の子が、黙って、こつくりをした。

「いいかい。放しちやいけないよ。事故が起きたら、取り返しがつかないからね。わかったね？」

女の子は、ブスツとした表情で、うなずくでもない。

「あれ、あんた、この犬の紐はどうしたの？ 持ってたの？ 紐は持っているんですよ？ 放し飼いやないよね」

男の人が話しかけても、女の子は一言も口をきかぬ。

「あのね、こちらの方が、親切に保護してくれたんだよ。お礼を言いなさい」女の子は、ちらっと私を見て、ほんの少し頭を下げた。男の人から、ビニール紐を受け取ると、黙って今来た方に歩き出した。犬はしきりに尾を振って、ついていく。しばらく行くと、振り返って私たちを見た。

「なんだか、あわれだなあ」と男の人が、思いのままを言葉にした。

「普通は犬が先に歩くでしょう？ 犬の散歩ってそうですよね。人は犬に引かれる形じゃないですか。特に子犬はそうですよね。牛のように引きませんよね」

「そういえば、そうですね」私はうなずいた。

2 「あまりかわいがられていないかも知れないな」つぶやくように言った。

「年を取るでしょう。人間と同じで手がかるようになる。するとね、わざと放す人がいるんですよ。わざと迷い犬にするんです」

男の人が嘆息した。

「今の犬は少なくともそうじゃなさそうだから、救いですけどね。迷い犬にする者は、首輪を外しちまいます。もちろん身元のわかる物は、全部取ってしまします」

3 「むごい話ですね」

「人間の縮図ですよ、ペットの世界は。動物がいじめられる。それは弱者がいたぶられているってことですよ」

罰が当たらねばよいが、とつぶやいた老人の声を、私は思い出していた。
(出久根達郎「迷い犬」より)

※ 店——「私」の営む古本屋。

邪慳——人の気持ちをくみ取らずに意地悪く扱うこと。
結果的にこの犬を不幸にする——保健所では引き取られた犬の飼い主

や引き取り手が一週間以内に現れなかったら、その犬を殺処分する規則になっていることを遠回しに言っている。

問一——部A・Bそれぞれの本文中での意味として最も適当なものを次のA～Eから選び、記号で答えなさい。

- A 心配でならない。
- イ 機嫌をそこねる。
- ウ 体調が気になる。
- エ 良心がとがめる。

- B
- ア 長生きすることの意味も見いだせない世の中である。
- イ 将来に対し何の期待も持てない薄情な世の中である。
- ウ 生存競争がより激しくなる弱肉強食の世の中である。
- エ もはや何らかの社会的な改革が必要な世の中である。

問二——部1のように「老人」が言ったのはなぜですか。四十字以内で答えなさい。

問三——部2について、

I 「男の人」は、なぜ「女の子」が「犬」をかわいがっていないと判断したのですか。「女の子」の様子から、三十字程度で答えなさい。

II 「男の人」は、「犬」のどのような様子からそう判断したのですか。二十字以内で答えなさい。

問四——部3とはどういうことですか。本文全体の内容を踏まえて答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ダイオキシンや農業、POPs(残留性有機汚染物質)、そして環境ホルモンへと二十世紀は様々な化学物質によって環境が汚染され、ヒトのみならず生態系もむしばまれてきました。環境汚染物質の中でも、ひとときわ突出した存在、それが水銀やカドミウム、鉛といった重金属のグループです。

人間の活動によって地球生態系に放たれた化学物質が、空気や水、そして食べものを通して生物の体内に侵入し、予想もしなかった被害をもたらす、これが環境汚染です。しかし、すべての化学物質が汚染物質になるのではなく、それらの中で毒性が高く、ここが重要なのですが、自然界で分解されることなく残留し、かつ生物蓄積性が高いものが問題となります。当然、汚染のレベルは放出された量と関係し、環境中に大量に存在すれば、リスクは大きくなります。※重金属はそもそも地中であつて、生物にさらされるのがなかったのです。それが掘り出され、利用され、放置されることによって毒物となりました。これらの点からも、自然界で決して分解されない重金属は、毒性が高く、生物の体に濃縮しやすい場合、深刻な汚染をもたらします。そして、二十世紀になって一気に増加した人工有機化合物と異なり、重金属は実に長い歴史があり、人類によって利用された総量が多量にのぼります。

【中略】

鉄や銅、鉛といった、現在も大量に使用されるコモンメタルから数千年遅れ、亜鉛やクロム、マンガン、ニッケルといった種々のレアメタルが十八世紀以降、金属単体(より純度の高い金属素材)として利用され始めます。そうになると、早くも十九世紀には、精錬所や工場で働く人々に中毒症状が確認されます。たとえば、のちに電池や合金に広く使われるマンガンは一七七四年に初めて科学的に分解され早速工場に使用されますが、一八三七年には軟マンガン鉱工場の労働者に健康被害が報告されます。同様にのちにメッキやステンレスの主要素材となるクロムが一七九八年に分離され工場で使用されると、一八六九年に重クロム酸塩作業者に皮膚障害が報告されました。

ほとんどの重金属は、当初『無邪気』に使用されます。つまり、化学的に単離され、多くのケースで「鉄に混ぜると画期的な特徴を得る」ことができると確認します。すると、驚くほどの早さで工場に利用されます。そして、利用開始時はその毒性がまったく考慮されませんでした。気づかなかつたということもあるでしょう。先に示したマンガンの場合「一八三七年までヒトの健康には影響ないものと考えられて」いました。「その年になって初めて」健康障害が指摘されるのですが、その報告は「その後、人目に触れないで」いるのです。ルイジの健康影響に関する報告が積み重なり、ようやく二十世紀初頭になって、マンガン中毒という病気が認識されるようになります。

【中略】

我が国における重金属への「タイシヨ」をみると、「悲劇を経験したからこそ、厳しく向き合い、よりよい状況を作り上げる」とはほど遠い、「できれば目をそらしたい。触れたくない」「厳しい現実からは逃げたい、そつとしておきたい」状況が感じられます。非常に残念なことと言わざるをえません。とくに、たびたびニュースでも見かける「風評被害」は、実際に公害事件でも大きな問題となりましたが、それを理由に『そこにある危機』を回避しようとしているケースまで見受けられます。たしかに、汚染のニュースがもたらす影響は深刻で、ひとたび食品に及べば、生産や流通に関わっている人々の暮らしに直結します。しかし、忘れてはならないことは、本当に健康を害するレベルで汚染されていたときは、しっかりと現実に向き合い、被害の防止に全力をあげる必要があるということです。農業も漁業者も、本当に人に喜ばせるものを提供したいことに変わりなく、危険なもの売りたいわげがありません。しかし目に見えない、味にも無い化学物質の毒性は怖ろしい

ものです。ことさら深刻な慢性毒性は時間が経って発覚するというやっかいな特徴があります。だからこそ、慎重かつ厳しい姿勢が必要となります。

先にも述べましたが、人類は危険な物質や高いリスクの技術と付き合っていかなければなりません。そのため、しっかりとルール作りが不可欠となります。このときに必要なのは『信頼』と『想像力』です。公開される情報にギネンをもたれば、風評被害は止まることを知らなくなります。発信者が受け手に信頼されている、当たり前の前提ですが、このことがきわめて大事となります。もう一つ、想像力ですが「ひとたび被害が出たら、これだけお金がかかる」という想像も大切ですが、より重要なのは「被害者の苦しみや悲しみを思いやる」想像力だと思います。

公害事件で長く尾を引く、認定の問題は、健康被害に苦しむ患者の実態を斟酌できていない厳しい基準に依拠します。そのため、被害者との溝はどんどん深まっていきました。それは『こころ』の溝です。こと、環境問題のように、一つの加害企業が補償ができないスケールの大きな被害が生じた場合は、自治体や国など、公共機関からの救いの手が求められます。このとき、被害者の苦しみに寄り添い、思いやることで、対策は異なってくると思われます。何の罪も無く、突然襲ってくる健康被害は、最低限の働くことさえできなくさせます。この理不尽な悲劇を黙殺して良いはずはありません。

【中略】

環境問題が静かに、でも確実に社会の関心を集めなくなっているような気が配がします。とくに若い人達に強く「環境を守らなければ」という意識が低くなっているように感じられるのです。悲しい事実として、景気が落ち込めば、企業も環境部門に力をそそがなくなります。環境系の就職も厳しくなります。これが現実です。我が国は一九九十年代から長い不景気が続き、世界もまたアメリカの住宅バブルが弾けたリーマンショック以来、長い、そして深刻な経済不況が続いています。

一方で、環境を守ることがごく自然に社会に浸透していることも感じます。ゴミを出す時は分別を気にし、まわりには『環境にやさしい』製品があふれています。都会でもすっかり成長した木々の緑が濃くなり、地方では過疎と運動して『里山が荒れるほど自然が回復』しています。

地球環境の危機が叫ばれて五十年、しかし世界は破綻することなく、携帯電話にインターネットにとイツソウの進歩を遂げています。このような流れが、ますます環境問題を切実と感じさせなくなった、それが日本の姿のような気がするのです。見わたせば、どこに環境危機があるのだ? というのが実感でしょう。しかし世界を知れば、水の枯渇、温暖化の進行、飢餓、無軌道な鉱山開発、都市化・工業化による環境破壊、危険な化学物質汚染の進行など、決して楽観して良い状態とは言えません。それでも、です。普通に暮らしている、切迫した環境問題は遠い世界のようになっています。ともすれば福島第一原発事故による放射能汚染でさえ忘れてしまっている、それが現状と感じられるのです。

あるとき学生に聞かれました。「人類は、環境と経済を天秤にかけたら、どちらを選択するのですか」。私は答えていました。「非常に難しい問題だけど、案外答えはシンプルです。ポイントは生きること、もう少し突っ込めば健康でしょう」。生きるためには食べなければなりません。ここが喫緊の優先事項です。この前提の中で、健康を害するものがあれば、お金をかけてでも食べなくする。つまり『環境』を優先する。

【中略】

しかし、問題はここでは終わりません。私は続けました。「この選択の上位にはもう一つ、キユウキョクの問題があります。それは『いのち』に対す

る社会の評価です。つまり、いのちの価値をどの程度ととらえるか、もつと
言えば『他人のいのち』を社会がどう評価するか、ここが問われることにな
ります。大きなポイントは『他者』です。人は、数少ない例外を除けば、自
分のいのちや健康の危機、苦しみを前にすると、間違いない『いのち』を優
先します。しかし、ひとたび自らが安全圏にいと認識すれば、そこから『他
者のいのち』をどこまで重くとらえられるでしょうか？ この問いにおいて
『他者』とは自らの両親や子ども、そして未来の子孫も含みます。
重金属が引き起こした公害はこの問題を大きくあぶりだします。あるとき
社会はなにを優先していたか？ そして、現在の重金属の利用、化学物質の
利用、ひいては今後の科学技術とのつきあいに人類はどのような選択をする
のか？

ここを決める要諦こそ、未来の子孫を含めた『他者のいのち』に対する思
いやりであり、どこまで『いのち』に重要性を認めその認識を社会が共有で
きるにかかっています。求められるのは『想像力』と『信頼』です。

豊かな想像力を養った若者が、ふたたび環境問題に関心をもって、積極的
に取り組んでいく、そんな社会になればと願っています。

(渡邊泉「いのちと重金属」より)

※ 重金属——金属のうち比重が比較的重いもの。金・白金・鉄・銅・鉛など。

コモンメタル——普通に生活の中で使われている金属。

レアメタル——まれにしか発見されず、入手がとても難しい金属。

単離——混合物から、ある化合物を純粋な物質として取り出すこと。

風評被害——根拠のないうわさによってもたらされる被害。

慢性——望ましくない状態が長く続くこと。

里山——人里周辺にあり、昔から日常的に、集落の人々が入り出して、

利用し、手入れをしてきた林や森のこと。

斟酌——相手の事情や心情をくみとること。

依拠——あるものに基づくこと。よりどころとすること。

喫緊——差し迫って重要なこと。

要諦——物事の最も大切なところ。

問一——部 a のカタカナを漢字に直しなさい。

問二——部 1 「化学物質」が環境汚染物質として生物にとって危険になる
のは、どういう場合ですか。次の文の [] に合う言葉を本文中か
ら三十文字以内でぬき出して答えなさい。

大量に毒性の高い化学物質が放出され、しかもそれが [] 場合。

問三——部 2 で「無邪気に」使用するとはこの場合、どのような意味です
か。それを説明している次の文の [] に入る適当な言葉を答え
なさい。

重金属のすぐれた特徴を知ると、[] という意味。

問四——部 3 「しつかり現実に向き合い、被害の防止に全力をあげる」と
は、どういうことですか。次のア～エから最も適当なものを一つ選び、
記号で答えなさい。

ア 風評被害の現実と向き合い、生産や流通に関わる人々の暮らしへの
影響を最小限にいとめること。

イ 風評被害の現実と向き合い、人々の健康を害する危険な食品を売ら
ない努力をできる限りすること。

ウ 環境汚染の現実と向き合い、汚染のニュースが人々の暮らしに与
える影響を最小限にいとめること。

エ 環境汚染の現実と向き合い、人々の健康にとって危険な汚染をく
いとめる努力をできる限りすること。

問五——部 4 で、日本で環境問題が「確実に社会の関心を集めなくなっ
ている」のは、ということが主な原因だと筆者は考えていますか。次の
ア～カより適当なものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 環境保護に企業が消極的になるほどに、長く深刻な経済不況が日本
でも世界でも続いていること。

イ ゴミを分別したり、環境に優しい製品を作ったりして、環境を守る
ことがごく自然に社会に浸透していること。

ウ 都会では緑の濃い木々が成長し、地方では過疎化に伴い里山が荒れ
るほどに自然が回復していること。

エ 地球環境の危機が叫ばれていても、世界は行き詰まることなく進歩
し続けているため、切実さを感じないこと。

オ 世界で起きている水の枯渇、温暖化、無軌道な鉱山開発、化学物質
汚染の進行などを楽観的に見ていること。

カ 福島第一原発事故による放射能汚染さえ忘れてしまうほどに、現代
人は深刻な環境汚染に慣れてしまったこと。

問六——部 5 「求められるのは『想像力』と『信頼』です」について説明
した次の文章の [] A・B・C に入る適当な言葉を本文中か
らぬき出して答えなさい。ただし、A・B は十字程度で、C は二十字以
内で答えること。

重金属や化学物質を使用した結果、環境汚染を起こしてしまったと
きに求められるのは、[] A [] が信頼できるものであることと、
[] B [] に対して想像力を働かせることである。そして、経済
性などよりも、地球の環境や [] C [] を優先で
きるようになるべきなのだ。

四 次の——部のカタカナを漢字で書きなさい。

- ① 天然の鮎がセイソクする川。
- ② コンメイの時代を力強く生きぬく。
- ③ コウガン無恥な政治家は、決して自らの過ちを改めようとしな
- ④ あの人にはキンペンな人だ。
- ⑤ この地域にクンリンする女王がいた。
- ⑥ 時代おくれのカンレイを打破すべきだ。
- ⑦ 雨水をジョウリュウして飲み水にする。
- ⑧ 美味しそうにウレた柿の実。
- ⑨ なにげない日々のイトナみこそが尊い。
- ⑩ 汗がヒタイを流れた。

